

要旨

本稿は、日本語において叙述形容詞の外項は形容詞句 AP 内部に現れないことを提示し、外項を導入するための機能範疇主要部(Pred(icative)P(hrase))が AP の上に投射される必要があることを再確認する。形容詞や名詞などの非動詞範疇の場合、叙述は機能範疇主要部 Pred の仲介により成立するという仮説が広く受け入れられている(Bowers 1993 他)。Nishiyama (1999)は、日本語の叙述形容詞(および形容動詞)は PredP を形成し、その主要部 Pred が音韻形態を持つと提案する。しかし、Matushansky (2018)は、PredP を仮定する理論的、経験的根拠はないと主張する。本稿は、代用形「そうだ」または代用形「そうだ」+ 繫辞「だ」による置き換えを適用して、埋め込み時制節、小節、多重主格構文における叙述形容詞の項の統語的振る舞いを考察し、日本語の叙述形容詞の外項は AP の外部に生起することを提示する。また、本稿で提案する形容詞の統語構造を踏まえ、叙述形容詞の項の格標示パターンを考察し、日本語の主格をデフォルト格、対格を依存格とする Aoyagi (2004)の提案に基づいた説明を試みる。

1. はじめに

叙述機能を担う語彙範疇の項構造に関して、これまで数多くの研究が行われてきた。動詞の場合、機能範疇主要部 v や Voice が外項を導入するという提案が一般的である。一方、形容詞や名詞などの非動詞範疇が叙述機能を担う場合、機能範疇主要部 Pred(icative)が必要であり、Pred が外項を導入するという仮説が広く受け入れられている(Bowers 1993)。また、Baker (2003)は、動詞と形容詞の相違のひとつとして、前者は指定部を認可する能力があるのに対し、後者はその能力ない点を挙げる。

英語をはじめとする言語において、多くの場合に機能範疇主要部 Pred は音韻形態を持たないことから、Pred の存在を経験的に支持することが難しいとされてきた。しかし、Nishiyama (1999)は、日本語では機能範疇主要部 Pred は音韻形態的に具現化されることを提案する。

- (1) a. 山が高い。
- b. 夜が静かだ。
- (2) a. [pred.cop] \leftrightarrow /k/ CA² ___
 b. [pred.cop, dum.cop, -past] \leftrightarrow /da/ (cf. Nishiyama 1999: 195, 197)

Nishiyama によると、日本語の形容詞と形容動詞は自然類を成すことから同じ統語範疇に属し、どちらも PredP を形成する。日本語の叙述形容詞および形容動詞の形態的相違は、(2)に示すように異なる音韻挿入規則が適用されることに生じるとするが、どちらの音韻形態の具現化にも Pred の持つ素性[pred]が関与する。

一方、Matushansky (2018)は、PredP を仮定する理論的、経験的根拠はないとし、形容詞の外項は AP の指定部に導入されると主張する。Matushansky は、動詞が外項を導入するために機能範疇主要部 v や Voice が必要であるという仮説は、動詞の外項と内項の間で考察されている数多くの統語的、意味的相違に基づくものである。しかし、Matushansky は、同様の考察が非動詞述語範疇に関しては当てはまらない、もしくは検証されていないと指摘する。また、Matushansky は PredP を仮定しないことにより生じるとされた経験的な問題に関

¹ Nishiyama (1999)によると、形容詞「高い(taka-Ø-i)」に機能範疇主要部 Pred が/k/という音韻形態形を持たないのは、現代日本語には以下の音韻規則があるためだとする。

(i) VELAR
* [ki]

² CA は Canonical Adjective であり、いわゆるイ形容詞を指す。

しても、PredP を仮定せずに説明可能であると主張する。例えば、度量句が AP の指定部の位置を占めるとすると、形容詞の外項は AP の指定部に生起できないことになるが、多重指定部を仮定すればこの問題は生じない。さらに、Matusyansky は意味論的観点からも Pred を仮定する必要がないと主張する。叙述は意味論上の概念であり、もし叙述の仲介のために機能範疇主要部 Pred が必要であれば、Pred は何らかの意味的役割を担うはずである。しかし、非動詞述語範疇(AP, NP, PP)は非飽和な関数であり、命題はその関数に主語項が代入されることにより得られるため、叙述の意味論において Pred は意味的に空虚でなければならない。

本稿では、形態的、統語的側面から叙述形容詞の統語構造を考察し、機能範疇 PredP の必要性について検証する。代用形「そう」および代用形「そう」+繫辞「だ」による置き換えを適用し、日本語の叙述形容詞の項構造についてひとつの提案を行う。また、本稿の提案を踏まえ、叙述形容詞の項の格標示パターンを考察し、日本語の主格をデフォルト格、対格を依存格とする Aoyagi (2004)の提案に基づいた説明を試みる。

2. 日本語の叙述形容詞の項構造

本節では、代用形「そう」および代用形「そう」+繫辞「だ」による置き換えを用いて、日本語の叙述形容詞の項構造を提案する。まず、日本語の例外的格標示構文における代用形「そう」による置き換えについての Kishimoto (2020)の考察を概観した後、代用形「そう」の統語的特性を再確認する。次に、代用形「そう」および代用形「そう」+繫辞「だ」による置き換えを用いて、埋め込み時制節、小節、多重主格構文を考察し、それを基に叙述形容詞の外項が AP の外部に生起することを提案する。

2.1. 代用形「そう」による置換

まず、日本語の例外的格標示構文における代用形「そう」の置き換えに関する Kishimoto (2020)の考察を概観する。日本語において、「言う」「思う」などの動詞の補部として現れる埋め込み時制節内の主語は主格標示だけでなく、「例外的に」対格標示を持つことが可能である。

(3) ケンは[エリが/をかわいい*(と)]思っている。

補文標識「と」が義務的であることから、(3)の埋め込み時制節は CP を形成する。対格は他動詞がその補部の名詞句に付与すると仮定すると、埋め込み主語は主節の動詞の目的語の位置に基底生成されるか、あるいはその位置へ移動し、対格標示を受けることになる。しかし、Kishimoto (2020)は、埋め込み主語が対格標示を持つ場合も埋め込み時制節 CP の内部に生起すると主張する。その根拠のひとつとして、Kishimoto は代用形「そう」による置き換えを適用した考察を挙げる。埋め込み時制節は、(4b)のように、代用形「そう」により置き換えることが可能である。

- (4) a. ケンはエリが/をかわいい*(と)言った。 b. マリもそう*(と)言った。 (cf. Kishimoto 2020: 11)
 (5) a. ケンはエリがかわいい*(と)言った。 b. ??マサオはマリがそう言った³。 (cf. Kishimoto 2020: 14)
 (6) a. ケンはエリをかわいい*(と)言った。 b. ??マサオはマリをそう言った。 (cf. Kishimoto 2020: 15)

(4b)が示すように、代用形「そう」で置き換えた場合には補文標識「と」が現れることができないことから、Kishimoto は(4b)の代用形「そう」は CP を置き換えたものであると仮定する。また、Kishimoto は(5b)および(6b)は非文であるとし、埋め込み主語は主格標示、対格標示どちらの場合も代用形「そう」と共起することができないという事実は、埋め込み主語が CP の内部に生起することを示していると主張する。

しかし、埋め込み時制節における叙述形容詞を修飾する程度表現などが現れる場合、(7b)のように対格標示を持つ埋め込み主語が、代用形「そう」と共起することできる⁴。一方、埋め込み主語が主格標示を持つ場合、形容詞を修飾する程度表現が現れても、代用形「そう」との共起は許されない。

- (7) a. ケンはエリを自分のクラスで一番賢いと思っている⁵。 b. ?マサオはマリをそう思っている。
 (8) a. ケンはエリが自分のクラスで一番賢いと思っている。 b. *マサオはマリがそう思っている。

³ Kishimoto (2020)は、(5b)および(6b)は非文法的とするが、筆者のインフォーマントの文法性判断によると、これらの例は容認度が低いものの完全に非文法的ではない。

⁴ 叙述形容詞を修飾する程度表現などが現れない場合に、埋め込み主語が代用形「そう」と別に現れると容認度が下がる要因に関しては現時点では不明である。

⁵ ここでは「自分のクラスで一番」というような程度表現は DegP を投射し、AP の内部に生起すると仮定する。DegP は AP の上に投射すると仮定しても問題ないが、本稿での分析には関与しない問題であるため、便宜上、程度表現は叙述形容詞の投射内にあると仮定する。

ただし、(7b)のように、対格標示された埋め込み主語が代用形「そう」と共起できるという事実は、埋め込み主語が CP の外部に生起することを必ずしも示す訳ではない。代用形「そう」は、埋め込み節以外にも、形容詞述語や副詞、小節など、さまざまな非名詞要素の置き換えが可能である。そのため、(7b)の「そう」は埋め込み時制節 CP の置き換えではないという可能性がある。代用形「そう」がどのような統語的構成素の置き換えとなるのかについて、ここで改めて考えていきたい。

例えば、(9b)に示すように、時制を持たない小節を代用形「そう」により置き換えることが可能である。

- (9) a. ケンはエリ*が/を(自分のクラスで一番)賢く思っている。 b. マサオもそう思っている。

小節には時制要素が現れないため、TP を形成せず、形容詞を主要部とした AP、あるいは叙述が機能範疇主要部 Pred により仲介されると仮定する場合は PredP を形成すると考えられる。従って、(9b)の代用形「そう」による置き換えは、AP あるいは PredP に適用すると言える。

また、代用形「そう」の後に繫辞「だ」が現れることがある。(10)および(11)のように、埋め込み時制節を「そう」+「だ」により置き換えることが可能である。

- (10) a. ケンは[エリが/を(クラスで一番)親切]だと思っている。 b. マサオもそうだ*(と)思っている。
(11) a. ケンはエリが/を(クラスで一番)賢いと思っている。 b. マサオもそうだ*(と)思っている。

(10a)が示すように、形容動詞が非過去時制において叙述機能を担う場合、語幹「親切」の後に繫辞「だ」が伴う。(10b)の代用形「そう」も繫辞「だ」を伴っており、「そう」は埋め込み主語と形容動詞の語幹が形成する構成素「エリが/を(クラスで一番)親切」を置き換えたものだと考えられる。また、「だ」は非過去時制の繫辞であり、その音韻形態の具現化には時制素性も関与すると考えられることから、主要部 T の位置に生起すると仮定する。従って、(10b)の代用形「そう」は、埋め込み節における時制要素を含まない叙述を置き換えたものと言える。一方、(11a)に示すように、いわゆるイ形容詞が叙述機能を担う場合、語幹の後に繫辞「だ」は現れないが、(11b)のように、代用形「そう」+繫辞「だ」による置き換えが可能である。形容詞と形容動詞は同一統語範疇に属し、どちらも AP を形成すると仮定すると(Nishiyama 1999)、(11b)の代用形「そう」も時制要素を含まない叙述、つまり AP あるいは PredP を置き換えたものとする。

また、(4)のように、埋め込み時制節 CP を代用形「そう」により置き換えた場合は、補文標識「と」が現れることができない。一方、(10b)および(11b)のように、代用形「そう」の後に繫辞「だ」を伴う場合は、補文標識「と」は義務的となる。つまり、代用形「そう」の後の繫辞「だ」は随意的であるとすると、繫辞「だ」が現れる場合は補文標識「と」は義務的となり、「だ」が現れない場合には「と」も現れないことになる。この事実は、埋め込み時制節 CP を繫辞「だ」を伴わず代用形「そう」のみで置き換える場合、「そう」は時制要素を含まない叙述、つまり AP あるいは PredP を置き換えたものであり、埋め込み節の主要部 C と T は音韻形態を持たない、あるいは統語的に存在しない可能性があることを示唆する。従って、時制節を代用形「そう」により置き換える場合、「そう」の先行詞を明らかにするために、代用形「そう」+繫辞「だ」を用いる必要がある。

最後に、時制のない小節を代用形「そう」+繫辞「だ」により置き換えた場合、容認度はかなり低くなる。

- (12) a. ケンはエリを(クラスで一番)賢く思っている。 b. ?*マサオもそうだと思っている。

繫辞「だ」は主要部 T に生起すると仮定すると、(12b)の代用形「そう」+繫辞「だ」は TP を形成することになる。しかし、その先行詞となる小節は時制要素を含まないため、AP あるいは PredP である。(12b)が非文となるのは、代用形「そう」とその先行詞が統語的に同一でないためであると考えられる。

上記の考察から、代用形「そう」について、暫定的に以下のように仮定する。

- (13) a. 小節を代用形「そう」により置き換える場合、「そう」置換は AP あるいは PredP に適用する。
b. 時制を含まない叙述を代用形「そう」により置き換える場合、「そう」置換は AP あるいは PredP に適用する。
c. 時制節を代用形「そう」+繫辞「だ」により置き換える場合、「そう」置換は AP あるいは PredP に適用する。

次節では、代用形「そう」による置き換えを用いて、叙述形容詞の統語構造について考察する。先に述べたように、時制節の置き換えの場合、代用形「そう」の先行詞を明らかにするために、代用形「そう」+繫辞「だ」を用いる。一方、時制要素を持たない構成素の場合、「そう」のみによる置き換えを適用して検証する。

2.2 叙述形容詞の統語構造

まず、埋め込み時制節における叙述形容詞について考察する。(10)-(11)で示したように((14)-(15)に再掲)、埋め込み時制節を代用形「そう」＋繫辞「だ」により置き換えることが可能である。この場合、代用形「そう」は AP あるいは PredP を置き換えたものである。

- (14) a. ケンはエリが/を(クラスで一番)親切だと思っている。 b. マサオもそうだと思っている。
(15) a. ケンはエリが/を(クラスで一番)賢いと思っている。 b. マサオもそうだと思っている。

また、代用形「そう」は埋め込み主語を含まない述部のみを置き換えることも可能である。(16)-(19)に示すように、埋め込み主語が主格標示の場合は代用形「そう」と共起することができる。埋め込み主語が対格標示の場合、容認度に揺れが生じるが、完全に非文とはならない⁶。

- (16) a. ケンはエリが自分のクラスで一番親切だと思っている。 b. マサオはマリがそうだと思っている。
(17) a. ケンはエリが自分のクラスで一番賢いと思っている。 b. マサオはマリがそうだと思っている。
(18) a. ケンはエリを自分のクラスで一番親切だと思っている。 b. ??マサオはマリをそうだと思っている。
(19) a. ケンはエリを自分のクラスで一番賢いと思っている。 b. ??マサオはマリをそうだと思っている。

代用形「そう」が AP あるいは PredP の置き換えであるとする、(16)-(19)の埋め込み主語は AP または PredP の外に生起することになる。補文標識「と」が義務的であることから、埋め込み時制節は CP を形成する。従って、埋め込み主語は、埋め込み TP の指定部、埋め込み CP の指定部、あるいは PredP の指定部(「そう」を AP の置き換えと仮定する場合)のいずれかに生起すると考えられる。

次に、代用形「そう」が小節を置き換えた場合について考察する。(9)に示すように((20)に再掲)、小節全体を代用形「そう」により置き換えることが可能である。小節は時制要素を含まないため、(20b)の代用形「そう」は AP あるいは PredP の置き換えたものである。

- (20) a. ケンはエリ*が/を(自分のクラスで一番)賢く思っている。 b. マサオもそう思っている。

また、代用形「そう」は小節全体ではなく、その述部のみを置き換えも可能である。(21a)に示すように、小節の主語は、代用形「そう」と別に生起することができる。

- (21) a. ケンはエリを自分のクラスで一番賢く思っている。 b. マサオはマリをそう思っている。

(21b)の代用形「そう」は、(21a)の小節の述部「自分のクラスで一番賢く」を先行詞とするが、この構成素は AP あるいは PredP を形成すると考えられる。しかし、小節が AP あるいは PredP であるならば、(21a)の「そう」により置き換えられている構成素は AP であり、小節は PredP を形成すると仮定する必要がある。そこで、(13)の代用形「そう」に関する記述は、(22)のように修正される。

- (22) a. 小節を代用形「そう」により置き換える場合、「そう」置換は PredP に適用する。
b. 時制を含まない叙述を代用形「そう」により置き換える場合、「そう」置換は AP に適用する。
c. 時制節を代用形「そう」＋繫辞「だ」により置き換える場合、「そう」置換は AP に適用する。

(22b)のように、時制を含まない小節の叙述を代用形「そう」により置き換える場合、「そう」は AP の置き換えである。従って、(21b)の小節の主語が代用形「そう」と別に現れることができるという事実は、形容詞の主語が AP の外部に生起することを提示する。また、小節が PredP を形成するのであれば、小節全体を代用形「そう」による置き換えが可能なことから、小節の主語は PredP の内部に生起すると言える。これらの考察から、本稿では叙述形容詞の外項の統語的位置に関して、(23)のような提案を行う。

- (23) 叙述形容詞の外項は AP の内部には規定生成されず、機能主要部 Pred によりその指定部に導入される。

(23)の提案を裏付けるために、日本語の多重主格構文を考察する。日本語にはひとつの叙述形容詞に対して、複数の主格標示を持つ名詞句が「主語」として生起することがある。

- (24) エリが(クラスで一番)歌が/*をうまい。

⁶ (18b)および(19b)の容認度が下がる要因については次節で論じる。

(24)では、いわゆる小主語「歌が」は形容詞「うまい」と叙述関係にあるが、小主語「歌が」は形容詞「うまい」とひとつの述語を形成しており、この述語はいわゆる大主語「エリが」と叙述関係にある(小林 2010)。埋め込み時制節内に複数の主格名詞句が現れる場合、(25b)のように、埋め込み時制節全体を代用形「そう」+繫辞「だ」により置き換えることが可能である。

(25) a. ケンはエリが(クラスで一番)歌がうまいと思っている。 b. マサオもそうだと思っている。

また、埋め込み時制節の述部のみを代用形「そう」により置き換える場合、(26b)のように、埋め込み節の大主語は「そう」と共起することが可能である。一方、(27b)および(28b)が示すように、埋め込み節の小主語は「そう」との共起が許されない。

(26) a. ケンはエリがクラスで一番歌がうまいと思っている。 b. マサオはマリがそうだと思っている。

(27) a. ケンはエリがクラスで一番歌がうまいと思っている。 b. *マサオは絵がそうだと思っている。

(28) a. ケンはエリがクラスで一番歌がうまいと思っている。 b. *マサオはマリが絵がそうだと思っている。

(22c)のように代用形「そう」はAPの置き換えであるとする、多重主格構文の大主語はAPの外部に、小主語はAPの内部に生起することになる。つまり、多重主格構文における叙述形容詞の外項は大主語のみであり、小主語は外項ではないということになる。このことは、(29)のように、日本語において形容詞が主要部となり、小主語を取り込んだ複合形容詞を生産的に形成するという事実からも裏付けられる。

(29) 意地悪い(≈意地が悪い), 幅広い(≈幅が広い), 欲深い(≈欲が深い), 色鮮やかな(≈色が鮮やかな),
口達者な(≈口が達者な), 神経過敏な(≈神経が過敏な), 頭脳明晰な(≈頭脳が明晰な)

(由本・影山 2009: 248)

由本・影山(2009)は、複合語は主要部が最も統語的に近い位置にある補部と結合することで派生すると提案する。例えば、英語の形容詞は「主語」と結合することができず、形容詞が義務的に取る前置詞補部の結合する(例: *The women are conscious of fashion.* → *fashion conscious women*)。これは、英語の形容詞の前置詞補部が、主要部に最も近い内項だからである。由本・影山は、日本語の複合語を形成するメカニズムも英語と同じであり、小主語は主要部である形容詞に最も近い「内項」であるため、(29)のような複合語が形成されると提案する⁷。ここでは、(24)-(28)の多重主格構文においても同様に、小主語は形容詞の内項であると提案する。

次に、多重主格構文が時制を含まない小節として現れる場合について考察する。(30a)に示すように、小節の大主語は対格標示となるのに対し、小主語は主格標示を持たなければならない。また、(30b)のように、小節全体を代用形「そう」により置き換えることが可能である。

(30) a. ケンはエリをクラスで一番歌が/*をうまく思っている。 b. マサオもそう思っている。

多重主格構文が埋め込み時制節として現れた場合と同様、小節の大主語は代用形「そう」と共起することが可能であるが、小主語が代用形「そう」と別に現れることができない。

(31) a. ケンはエリをクラスで一番歌が/*をうまく思っている。 b. マサオはマリをそう思っている。

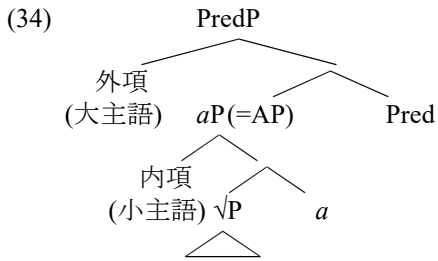
(32) a. ケンはエリをクラスで一番歌が/*をうまく思っている。 b. *マサオは絵が/をそう思っている。

(33) a. ケンはエリをクラスで一番歌が/*をうまく思っている。 b. *マサオはマリを絵が/をそう思っている。

(22b)で提示したように、時制を含まない叙述を代用形「そう」により置き換える場合、「そう」置換はAPに適用する。多重主格構文の大主語は叙述形容詞の外項であり、APの外部に生起するため、(31b)のように小節の大主語は「そう」と別に現れることができる。一方、多重主格構文の小主語は叙述形容詞の内項であり、AP内部に生起することから、(31b)および(32b)のように小主語はAPの置き換えである「そう」と共起することが許されない。

従って、日本語の叙述形容詞は(34)に示す統語構造を持つ。ここでは分散形態論の立場を取り、形容詞および形容動詞の語根は範疇未指定であり、範疇を決定する機能範疇主要部 *a* と結合して *aP* (=AP)を形成すると仮定する。

⁷ 由本(2009)は、すべての多重主格構文から複合形容詞が形成されないことから、小主語と形容詞の結合は統語的編入ではなく、語彙意味に制約された編入であるとする。



3. 叙述形容詞の項の格標示に関する示唆

本節では、前節で提案した形容詞の統語構造を踏まえ、日本語の主格をデフォルト格、対格を依存格とする Aoyagi (2004) の提案に基づいて、叙述形容詞の項の格標示パターンの説明を試みる。

まず、多重主格構文について考察する。多重主格構文では、大主語、小主語ともに主格標示を持つ。小主語は対格標示を持つことが許されない。

(35) エリが(クラスで一番)歌が/*をうまい。

主格標示は、主要部 T の持つ素性とその指定部にある名詞句の素性との一致の結果、名詞句に付与されると仮定すると、多重主格構文において、大主語、小主語どちらも TP の指定部の位置に生起することになる。しかし、(34)のように、多重主格構文の小主語は AP の内部に生起すると提案する。そこで本稿では、日本語の格は形態格とする Aoyagi (2004) の提案に基づき、ガ格とヲ格は(36)のように付与されると仮定する。

(36) a. ガ格は名詞句にデフォルトとして付与される。

b. ヲ格は依存格であり、最小の領域(フェイズ)において別の無標の(つまり格付与されていない)名詞句によって c 統御される無標の名詞句に付与される⁸。
(cf. Aoyagi 2004: 5)

Aoyagi (2004)によると、形態格の具現には階層があり、依存格(ヲ格)はデフォルト格(ガ格)より先に付与される。また Aoyagi は、依存格の付与の対象となるのは、 θ 役割が与えられた名詞句のみであると主張する⁹。(35)の小主語「歌が」は、形容詞「うまい」と共に述部を構成する要素であり、 θ 役割を持たないと仮定する。そのため、小主語には依存格が付与されず、大主語、小主語ともにガ格を持つことになる。

次に、多重主格構文が小節として現れる場合、大主語は対格標示となるが、小主語は主格標示を持つ。

(37) ケンがエリ*が/をクラスで一番歌が/*をうまく思っている(こと)

小節は時制のない PredP を形成し、埋め込み大主語はその指定部に生起する。埋め込み節 PredP の指定部が主節から可視的であるとすると、埋め込み大主語は同じフェイズ内にある主節の主語により c 統御され、依存格(ヲ格)が付与される。(35)と同様、小節の小主語「歌が」は θ 役割を持たないため、依存格付与の対象とはならず、デフォルト格が付与される。

最後に、例外的格標示構文が埋め込み時制節として現れる場合について考察する。(38b)および(39b)に示すように、埋め込み節の述部を代用形「そう」+繫辞「だ」により置き換えることが可能である。ただし、(39b)のように、対格標示された埋め込み主語が「そう」と別に現れた場合、容認度に揺れが生じる。

(38) a. ケンはエリが自分のクラスで一番賢いと思っている。

b. マサオはマリがそうだと思っている。

(39) a. ケンはエリを自分のクラスで一番賢いと思っている。

b. ??マサオはマリをそうだと思っている。

ここで重要なことは、(39b)はどこにも強調が置かれなない場合には容認度が下がるが、対格標示された埋め込み主語「マリを」に強調をおいた場合は容認度が上がるという点である。そこで、(39)の埋め込み主語が強調の解釈を持つ場合は、埋め込み節 CP の指定部に移動すると仮定する。埋め込み節 CP の指定部は主節から可視的であるため、埋め込み主語は同じ領域内にある主節の主語により c 統御され、対格標示が可能となる。

⁸ Aoyagi (2004)は、ヲ格はフェイズではなく最小の時制節において別の無標の名詞句に c 統御された場合と定義する。

⁹ Aoyagi (2004)は、多重主格構文の例として(i)を挙げ、大主語「文明国が」および「男性が」が θ 役割を付与されていないため、小主語「平均寿命が」が依存格付与の対象とならないとしている。

(i) 文明国が男性が/*を平均寿命が/*を短い。

一方、強調の解釈を持たない場合、埋め込み主語は埋め込み TP の内部に留まることで、同じフェイズ内で別の名詞句によって c 統御されず、対格標示が付与されないと考える。しかし、(39a)は埋め込み主語が強調の解釈を持たない場合にも文法的であることから、埋め込み主語が対格標示を持つためには、必ず埋め込み CP の指定部に移動しなければならない。そこで、主語を含まない述部のみを代用形「そう」+繫辞「だ」により置き換える場合、強調の解釈を持たない限り、主語は PredP の指定部に留まることが要求されると仮定する。その要因のひとつとして考えられるのは、繫辞「だ」の存在である。「だ」の音韻形態の具現化には時制が関与することから、「だ」は主要部 T の音韻形態であると仮定する。代用形「そう」による置換が AP に適用し、主要部 T が「だ」として音韻具現を持つ場合、主要部 T は埋め込み主語が PredP の指定部から CP へ移動することを阻止すると仮定するが、このメカニズムの解明については今後の研究の課題とする。

さらに、埋め込み時制節の述部を代用形「そう」により置き換える場合について考察する。(40b)のように、埋め込み主語が対格標示を持つ場合、「そう」と共起することが可能である。一方、(41b)のように、主格標示された埋め込み主語は「そう」と別に現れることが許されない。

- (40) a. ケンはエリを自分のクラスで一番賢いと思っている。 b. ?マサオはマリをそう思っている。
 (41) a. ケンはエリが自分のクラスで一番賢いと思っている。 b. *マサオはマリがそう思っている。

(40b)および(41b)の埋め込み主要部 C や T は、音韻形態を持たないだけでなく、統語的にも存在しないと仮定する。つまり、代用形「そう」は常に AP あるいは PredP の置き換えであると仮定する。(40b)および(41b)の代用形「そう」は AP の置き換えであり、埋め込み主語は PredP の指定部に生起する。埋め込み主語は、同じフェイズ内にある主節の主語により c 統御されるため、依存格(ヲ格)が付与され、ガ格標示は許されないことになる。しかし、代用形「そう」は先行詞と統語的に同一ではない構成素を置き換えたものであるとすると、(12)の非文法性を説明することができなくなる。この問題についても今後の課題とする。

本節では、日本語の格を形態格とする提案に基づき、叙述形容詞の項の格標示パターンの説明を試みた。しかし、埋め込み時制節の主語の格標示パターンに関しては多くの問題が残り、さらなる考察が必要である。

4. 結語

本稿は、代用形「そう」および代用形「そう」+繫辞「だ」による置き換えを用いて日本語の叙述形容詞の項構造を考察し、形容詞の外項は AP の外部に、内項は AP の内部に生起することを提示した。この提案は、叙述形容詞の外項を導入するための機能範疇 PredP を仮定する必要性を主張するものであり、Nishiyama (1999)の日本語の形容詞の統語構造に関する提案を支持する。また、Baker (2003)は形容詞という語彙範疇はその指定部を認可する能力がないとするが、もし日本語の叙述形容詞の内項が AP の指定部に生起するのであれば、形容詞の指定部認可能力は言語間で差異がある可能性がある。

さらに、本稿の叙述形容詞の統語構造の提案を踏まえて、叙述形容詞の項の格標示パターンを考察した。Aoyagi (2004)の提案に従い、主格をデフォルト格、対格を依存格と仮定し、日本語の叙述形容詞の項の格標示パターンの説明を試みた。しかし、日本語の格標示のメカニズムについてはさらなる考察が必要である。

また本稿は、叙述形容詞の外項は機能範疇主要部 Pred により導入されることを提案したが、Matushansky (2018)が指摘した問題は依然として残る。特に、非動詞述語範疇が叙述機能を担う場合、Pred による仲介が必要であるにもかかわらず、Pred が意味的に空虚でなければならないという点は大きな問題である。非動詞述語範疇の意味的特性の再検証も含め、Pred の意味論の解明は今後の研究の課題である。

参考文献

- Aoyagi, Hiroshi (2004) "Morphological Case Marking as Phoneticization," *Proceedings of the 2004 LSK International Conference* vol. 1, 50-71, Linguistic Society of Korea.
 Baker, Mark C. (2003) *Lexical Categories: Verbs, Nouns, and Adjectives*, Cambridge University Press, Cambridge.
 Bowers, John (1993) "The Syntax of Predication," *Linguistic Inquiry* 24 (4), 591-656.
 Kishimoto, Hideki (2020) "On the Position of ECM Subjects: A Case Study from Japanese," *Linguistic Brunensia* 68 (2), 7-26.
 小林亜希子 (2010) 「多重主語構文—失われた記述的一般化を求めて(前編)」, 言語文化学科(編)『島大言語文化: 島根大学法文学部紀要』第 31 号, 53-109.
 Matushansky, Ora (2018) "Against the PredP Theory of Small Clauses," *Linguistic Inquiry* 50 (1), 63-104.
 Nishiyama, Kunio (1999) "Adjectives and the Copulas in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 8, 183-222.
 由本陽子 (2009) 「複合形容詞形成に見る語形成のモジュール性」, 由本陽子・岸本秀樹 (編)『語彙の意味と文法』, くろしお出版, 東京.
 由本陽子・影山太郎 (2009) 「第 7 章 名詞を含む複合形容詞」, 影山太郎 (編)『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』, 大修館書店, 東京.